

**アユ** (アユ科)

撮影：今井 仁氏

**学名**： *Plecoglossus altivelis altivelis*

**大きさ**： 10～30 cm

**特徴**： 背側は青みを帯びたオリーブ色。鰓蓋の後方にははっきりした楕円様の黄色い斑紋がある。河床の石や岩の付着藻類をエサとし、エサ場を守るために“なわぼり”をつくる。その習性を利用した友釣りが有名。産卵期は、雄雌とも体が黒くなる。雄は体表がざらざらし、追星が顕著。基本的には1年で生涯を終える年魚。

**国内の分布**： 北海道西部以南から九州。

**県内の分布**： 霞ヶ浦水系、利根川、鬼怒川、久慈川や那珂川、県北地域の河川など。

**県内での生態**： 茨城県には、一生のうちに海と川を行き来するアユと、琵琶湖のように海へ行かず淡水域で一生を終えるアユがいる。久慈川や那珂川などのアユは前者のタイプで、秋に川の中・下流域の砂礫底に産卵し、ふ化した仔魚は海へと降り、翌春まで海ですごしたのち、川へとのぼる。

これに対し、霞ヶ浦・北浦のアユは、湖への流入河川で産卵、仔稚魚期を湖内です



写真1：久慈川で採集された流下仔魚。

ごし、春には流入河川へ遡上する。もともとは海を行き来するタイプであったが、常陸川水門の閉鎖で仔稚魚期のアユが海に出にくい環境になったことが淡水域で一生を終えるようになった一因と考えられている。

久慈川での生態について紹介する。漁業者の話では、中・上流域でなわぼりを作り、活発にエサを食べていたアユは、夏の終わりから増水のたびに下流の産卵場へと移動する。産卵は“わせくち”と呼ばれる大型のアユから始まるといわれ、それに次ぐアユが“なかで”と呼ばれる。盛期には、瀬付き行動（産卵のため瀬に集まる行動）が

中・下流域のあちこちの瀬でおこり、産卵は暗くなってから活発になる。秋が深まるにつれ、産卵するアユは小さいものが多くなるという。

ふ化した仔魚は、川の流れによって海へ流下する。例年、流下のピークは10～11月で、主に夜間に流下する。水温が高い10月には、全層を流下し、水温が低くなると中層と底層を主に流下する。例年であれば流下のピーク時、1日に2,000万尾ものアユが海へ流れ下る（写真1）。

海に出たアユは、河口や海岸近くの沿岸域で生活し、カイアシ類などの動物プランクトンを食べて成長する。普通3月上中旬から川への遡上を開始し、ピークは例年であれば4月下旬から5月中旬頃にある。アユ漁が解禁となる6月以降も遡上は続く。

遡上期の前半は体長8cm程度の大型個体が、後半は7cm未満の小型個体が川をのぼる「遡上アユの小型化」が知られている。遡上時期によってアユの大きさに違いがあることは、ふ化する時期や海域の水温が影響する。

早春にのぼる大きい若アユは“いちばんこ”と呼ばれ（写真2）、ベテランの漁業者は6月の解禁日直後に釣れるアユと考えている。



写真2：全長10cmの若アユ。

霞ヶ浦・北浦での生態を紹介する。産卵場は、霞ヶ浦では桜川や恋瀬川、北浦では巴川で見つかっている。湖に流下したアユはカイアシ類などの動物プランクトンを食べて育ち、湖内全域に広がっていく。冬、水温が5℃近くまで下がるため、成長が停滞する。4月になれば、流入河川に遡上するアユがみられる。

**備考：**茨城県は天然アユが遡上する川に恵まれ、アユ釣りやアユ漁が盛んに行われている。主たる漁法は、なわばりという習性を利用した友釣りや投網などである。久慈川では、木や竹を組んだ構造物で川をせき止めて魚をとる築（やな）と呼ばれる漁も行われている（写真3）。

那珂川と久慈川は日本釣振興会の「天然アユがのぼる100名川」に選出された全国屈指のアユ河川。県の景勝地と重なり、初夏には友釣りを楽しむ釣人の姿が多く見られる。また、県北地域の大北川、つくば市近郊の桜川では、アユのエサ釣りが楽しまれている。

本県とアユとのかかわりは古く、久慈川については奈良時代に編纂された『常陸国風土記』に「あらゆる清き河は、源、北の山におこり、近く郡家の南を経て久慈の河



写真3：観光客で賑わう大子町の築（やな）。

に会う。多く年魚(アユ)を取る。」とある。奈良時代から漁労の対象であったことがうかがえる。

久慈川では、漁協を中心に釣り人や漁業者が集まり、大規模な産卵場を造成する取り組みを開始し、効果を算定するために流下仔魚調査を行っている(写真4,5)。また、竹や縄を利用して産卵場へ下るアユをとめ、投網で漁獲する縄張り漁の期間を短縮するなど、天然アユ資源を増やし安定化を図る機運が高まっている。

これは全国各地でアユの減少が目立ち始めたこと、放流に偏った増殖策に限界を感じはじめたことによる。また、釣り人のあいだで、6月の解禁日直後に釣られる1番アユが少なくなったといわれることも大きい。今後の成果に期待したい。

天然アユ資源の安定化のためには、釣り人のマナー向上も大切。産卵場に集まった親魚や、川に遡上するため河口に集まった稚アユをたくさん釣ってしまうことは、言うまでもなくアユにとってよくないことである。

#### 主な文献：

荒山和則・須能紀之・山崎幸夫(2010)茨城県久慈川における流下アユ仔魚の鉛直分布. 日本水産学会誌, 76: 812-823.

金光 究・須能紀之・山崎幸夫・荒山和則(2009)茨城県久慈川とその支流におけるアユ流下様式の違い. アユ資源研究部会報告書(平成18~20年度のとりまとめ), 30-31.

荒山和則(2009)久慈川河口周辺海域におけるアユ仔稚魚の分布. アユ資源研究部会報告書(平成18~20年度のとりまとめ), 26-27.

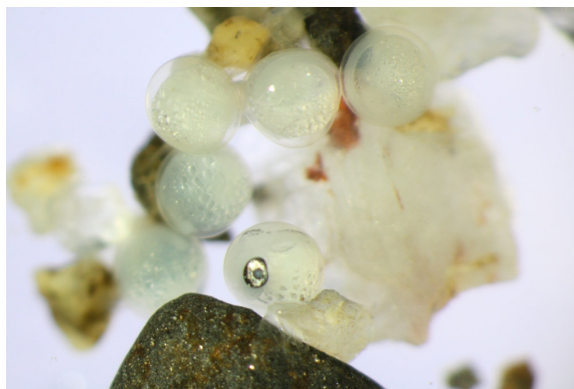


写真4：辰ノ口の産卵場造成地で採集されたアユの卵。中央下の卵では仔魚の眼が見える。



写真5：流下仔魚を採集する漁協組合員ら。作業は夜通し行われる。

荒山和則(2006)茨城県久慈川におけるアユの遡上様式. 茨城内水試研究報告, 40: 45-54.

荒山和則(2009)茨城県沿岸域におけるアユ仔稚魚の成長相違要因. 海洋と生物, 31:495-500

金光 究・荒山和則(2009)茨城県沿岸域におけるアユ仔稚魚の成長解析. アユ資源研究部会報告書(平成21年度), 30-31.

根本隆夫・河崎 正・久保田次郎(1996)霞ヶ浦水系におけるアユの生態学的研究-I. 茨城内水試調査研究報告, 32: 21-35.

根本隆夫・久保田次郎・中村 誠・杉浦仁治(1997)霞ヶ浦水系におけるアユの生態学的研究-II. 茨城内水試調査研究報告, 33: 1-16.

根本隆夫・中村 誠・杉浦仁治(1998)霞ヶ浦水系におけるアユの生態学的研究-III. 茨城内水試調査研究報告, 34: 1-21.